

2. 都市特性

2-1 奈良市の歴史と遺産

奈良は、710年に「平城京」として都が開かれ、シルクロードの東の終着駅として天平文化の華を咲かせ、かつて日本の首都だった70余年の間、政治経済の中心地としておおいに栄えました。最盛期には人口が10万人を数えたこともあったといわれています。784年に都が長岡京に移った後も平城京をかざった諸大寺はそのまま残され、南都と呼ばれるようになり、社寺の都として生まれ変わりました。

11世紀から12世紀にかけて東大寺、興福寺、春日社（現春日大社）、元興寺などの社寺が勢力をもち、社寺の仕事に携わる人や農民が住むまちが境内の外にでき、それらは「郷」と呼ばれました。12世紀後半の戦火によって多くの社寺や郷が損壊を受けましたが、復興事業が活発に進められ、郷は以前にもまして充実し、今日の奈良の原型がかたちづくられました。

15世紀後半には応仁の乱を避けて、京都の貴族や商人が奈良に疎開してきたこともあり、京都との関係はいっそう親密になりました。また、自治都市「堺」との交流も深まり、商業や手工業が発達しました。16世紀初めには東大寺、興福寺といった支配をこえて郷と郷との連合が進み、1567年の戦乱で東大寺大仏殿は再び焼失しましたが、郷民によるまちづくりが発展し、1595年の文禄検地によって、近世の奈良町が成立しました。

17世紀中頃から奈良晒、酒造、製墨などの産業がめざましく発展し、産業都市として繁栄しました。1692年には大仏が修造され、1709年には大仏殿が再建されました。この頃から奈良見物に訪れる人が多くなり、奈良はしだいに観光の町としての性格をもつようになりました。

明治維新には廃仏毀釈により多くの寺院が衰退し、廃藩置県の際奈良県は一時期、堺県や大阪府に合併されましたが、1887年には奈良県庁が奈良町に復帰し、1898年2月1日に人口29,986人、面積23.44k㎡の規模で奈良市制が施行されました。

この時期から都市基盤の整備も進み、鉄道については1890年に奈良・王寺間がまず開通し、大阪（現JR関西線）へは、1892年に通じました。1914年には奈良・大阪間（現近鉄奈良線）が開通しました。さらに周辺都市との間の交通網の整備も進み、観光客は増えていきました。

第2次世界大戦で奈良は大きな戦禍をまぬがれ、貴重な自然や文化財、社寺が保存されました。1950年には「奈良国際文化観光都市建設法」が成立し、国際文化観光都市として整備を進めていくことになりました。

この頃から近鉄学園前駅周辺において宅地開発が進められ、高度成長期には西北部丘陵一帯にも宅地開発が広がり、住宅都市としての機能を併せもつようになりました。1988年に制定された「関西文化学術研究都市の建設に関する計画」においては「平城宮跡地区」と本市を含む「平城・相楽地区」が文化学術研究地区に指定されました。

その後、市制100周年を迎えた1998年12月には、「古都奈良の文化財」として東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の8

資産群が世界遺産に登録されました。2002年4月には、全国で29番目の中核市に移行し、保健福祉や都市計画などの様々な分野で多くの権限が委譲されました。さらに、2005年4月には、奈良市、旧月ヶ瀬村、旧都祁村が合併し新生「奈良市」が誕生しました。2006年3月には、けいはんな線が開通し、西北部地域と大阪・東大阪沿線エリアがより身近になり、人・モノ・情報・文化・産業の交流が今後一層活発になるものと期待されています。



和州奈良之図 天保15年（1844年）

（社寺を包む春日山一帯の緑や佐保川など、まちを取り囲む緑の骨格は、江戸時代の古地図に描かれた姿を今に伝えています。）

2-2 奈良市の概況

本市は、奈良県の北部に位置し、北は京都府、東は山添村、宇陀市、三重県、南は桜井市、天理市、大和郡山市、西は生駒市と接しています。

面積は 276.84 km²で、奈良県の総面積のほぼ 7.5%を占め、東西 33.51 km、南北 22.22 kmで東西に長い形をしています。

2-2-1 自然条件

(1) 気候

奈良市の気候は、奈良盆地・大和高原ともに内陸性気候を示し、夏は高温、冬は低温となり、年較差が大きいのが特徴です。奈良盆地（奈良地方気象台）では、年平均気温は 14℃前後で夏は県下でも最も気温が高くなります。一方、大和高原（針観測所）は、奈良盆地に比べて年平均気温で約 3℃低くなっています。かつては、大和高原のこうした気候特性や都に近い立地条件を活かして、冬季にできた氷を保存する氷室があったことが知られています。また、昼と夜の温度差が大きいことも特徴であり、これがお茶の栽培に最適な条件となり、質の高い大和茶の栽培が営まれています。

年降水量は、奈良盆地で約 1,400mm と少なく、内陸性の気候をよく反映しています。このため、水田のかんがい用水が不足し、これを補うため池が多く造られてきました。一方、大和高原は、奈良盆地に比べ年降水量は 200mm程度多くなっています。月平均降水量をみると、季節風に関係して冬は少なく、夏が多く、なかでも6、7月の梅雨期、9月の台風期が多くなっています。降水量の少ない奈良市では、水の確保が課題でしたが、大和高原からの自然流下式の導水路事業として須川ダムが建設され、増大する水需要に対応してきました。

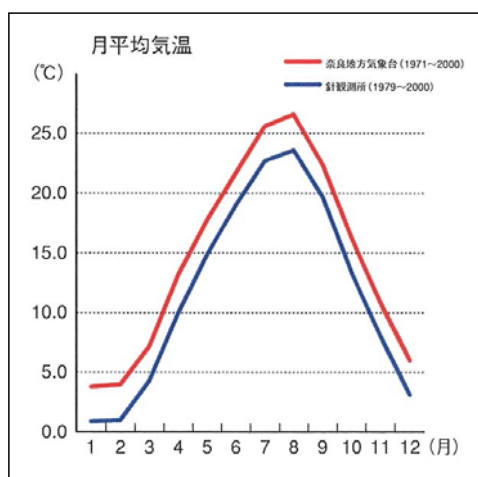


図 2 月別平均気温

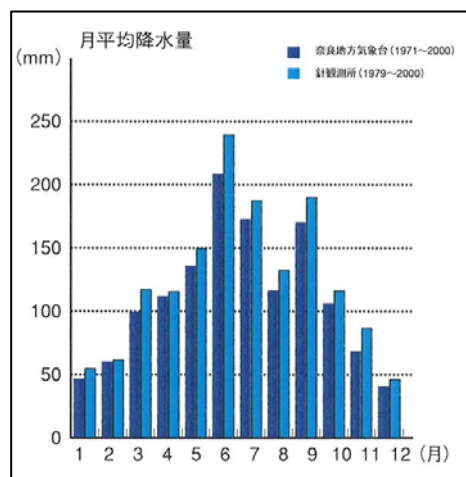


図 3 月別平均降水量

(2) 地形と水系

奈良市の旧市街地東部には、南北方向に春日断層が走り、これを境にして東部と西部で地形条件が大きく異なります。

東部は、標高 200～500mで緩やかな起伏をもつ大和高原が広がり、布目川、白砂川、名張川などが北に向かって流下し、木津川に合流しています。南端には、大和高原の最高峰である貝ヶ平山(標高 822m)をはじめ、香酔山(標高 796m)、額井岳(標高 812.6m)などが笠置山地に連なっています。

西部には、おおむね標高 100m以下の平地で構成される奈良盆地(大和平野)が広がり、佐保川、菰川、秋篠川、岩井川が南に向かって流下し、大和川に合流しています。市域の西端には標高 200m内外の矢田丘陵が南北に延び、その東方には標高 80～100m の西ノ京丘陵が位置し、その間を富雄川が南流しています。旧市街地の北部には、標高 90～110 mの緩やかな起伏をもった平城山丘陵地が位置し、京都府との境界部を形成しています。

丘陵地は、大阪層群といわれる未固結の堆積物からなり、改変が容易であることから、近年、多くの住宅開発が進められてきました。

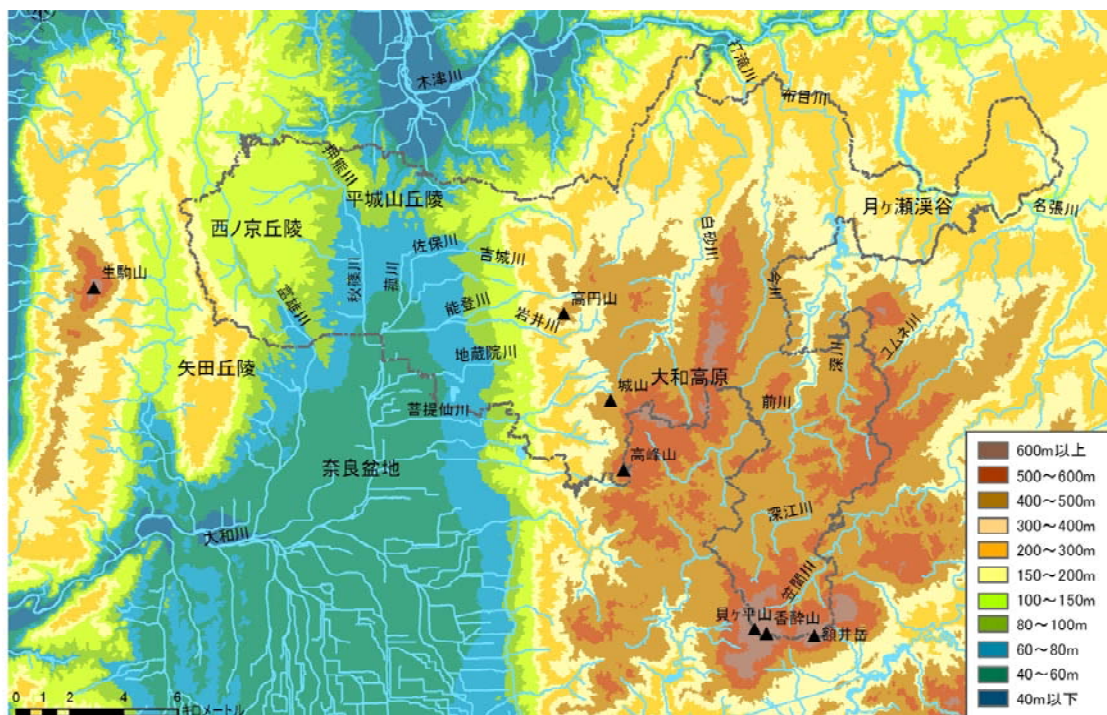


図 4 地形標高図



富雄川



秋篠川



佐保川

（３）動植物相

① 動物

奈良公園一帯には、「奈良のシカ」（国指定天然記念物）が生息しており、春日山原始林は、ルーミスシジミ、オオムラサキ、ムネアカセンチコガネ、モリアオガエル、カスミサンショウウオなどの貴重な昆虫や両生類の生息地となっています。

主なカモ類の渡来地としては、大谷池などがあげられますが、主要な河川をはじめ、田園部の大小のため池や古墳の周濠なども、冬季には多くのカモ類が集まる重要な水辺環境を提供しています。

また、平成 22 年度版『奈良市の環境』（環境省の自然環境保全基礎調査結果）によると、奈良市における学術上重要な種として、両生類・は虫類で 2 種（モリアオガエル、カスミサンショウウオ）、昆虫類（指標昆虫、特定昆虫等）で 103 種が報告されています。

② 植物

奈良市は古くから開け、かつては都として繁栄したにもかかわらず、旧市街地東部には、特別天然記念物春日山原始林、その前面には天然記念物春日大社境内ナギ樹林が広がるなど、優れた植生が約 300ha にわたってみられます。またその周辺には、薪炭林として利用されたアカマツ林（手向山から新若草山）、クヌギ・コナラ林（高円山）、毎年山焼き（火入れ）をして維持されるススキ草原やシバ地（若草山）が広がっています。

大和高原には、主としてアカマツ林が発達し、一部がスギ・ヒノキの植林地となっているほか、集落や農道に近い山林では茶畑としての利用が多くみられます。水田は、谷筋にそって奥深くまで続いているようですが、近年では遊休地化しているところもみられます。

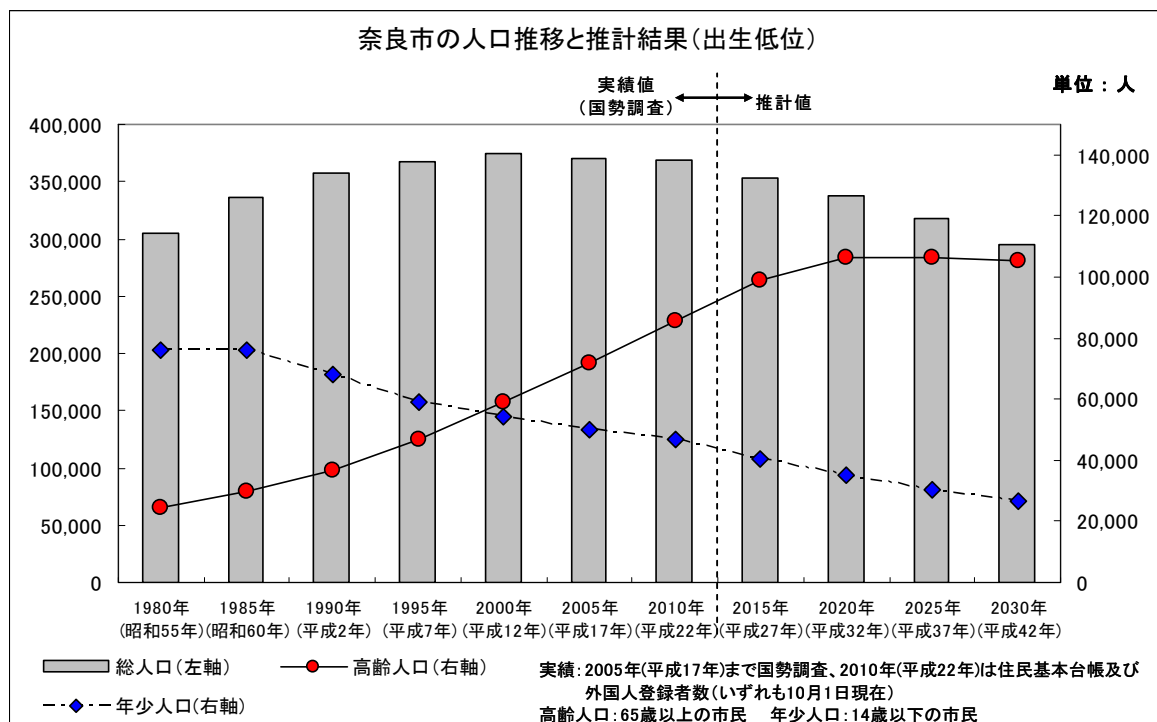
盆地部のほとんどは水田で占められていましたが、近年では幹線道路沿線での宅地化が進んでいます。また、西部の丘陵地の多くはアカマツ林で占められていましたが、近年では大規模に造成され住宅団地を中心とした市街地に急速に変貌しています。残された樹林についても、マツ枯れの進行や竹林の拡大など、緑の質の低下が懸念されています。

2-2-2 社会条件

(1) 人口推移

本市の人口は、1950年代からの高度経済成長期に合わせて、大阪・京都などの大都市への近接性を生かした住宅地が形成されてきたことなどにより、2000年（平成12年）頃までは着実な人口増加を遂げてきました。しかし、近年は全国的な傾向と同様に、本市においても、人口減少と少子高齢化は確実に進行しています。

本市の人口は、2000年（平成12年）の375,000人（※旧月ヶ瀬村、旧都祁村を含む。）をピークに減少傾向が続き、2010年（平成22年）は、368,000人となっています。



出典：奈良市第4次総合計画

図5 人口の推移

（２）土地利用と産業

本市における土地利用の推移をみると、昭和 25 年頃の近鉄学園前駅付近の住宅地開発を契機に、市西部で住宅地開発があいつぎ、市北部においても、日本住宅公団（現 UR 都市機構）による平城ニュータウンの建設が進められました。これらの新規開発は、昭和 50 年代に入っても続き、近鉄線の各駅を拠点として徐々に市域境界付近に向かって拡大していきました。中心市街地に隣接する地域においては、小規模な住宅地の開発や事業所の立地など農地の宅地化が進み、市街地が拡大してきました。市南部には古くからの農村集落や農地が残されていますが、小規模な住宅開発による市街地化が進行しています。また、一部は工業集積地となっています。

春日山から東の大和高原は、山林が広がり、茶の栽培など農林業が営まれている地域です。都祁地区は、国道 25 号（名阪国道）が通り交通の便が良いことから、工業団地の開発が進んでいます。

表 1 土地利用面積

単位：ha

区 分	都市計画区域	市街化区域	市街化調整区域
田	2,160.90	231.90	1,929.00
畑	559.80	67.00	492.80
山林	11,356.80	212.50	11,144.30
水面	298.70	81.20	217.50
その他の自然地	369.70	46.90	322.80
市街地	6,414.10	4,161.50	2,252.60
合 計	21,160.00	4,801.00	16,359.00

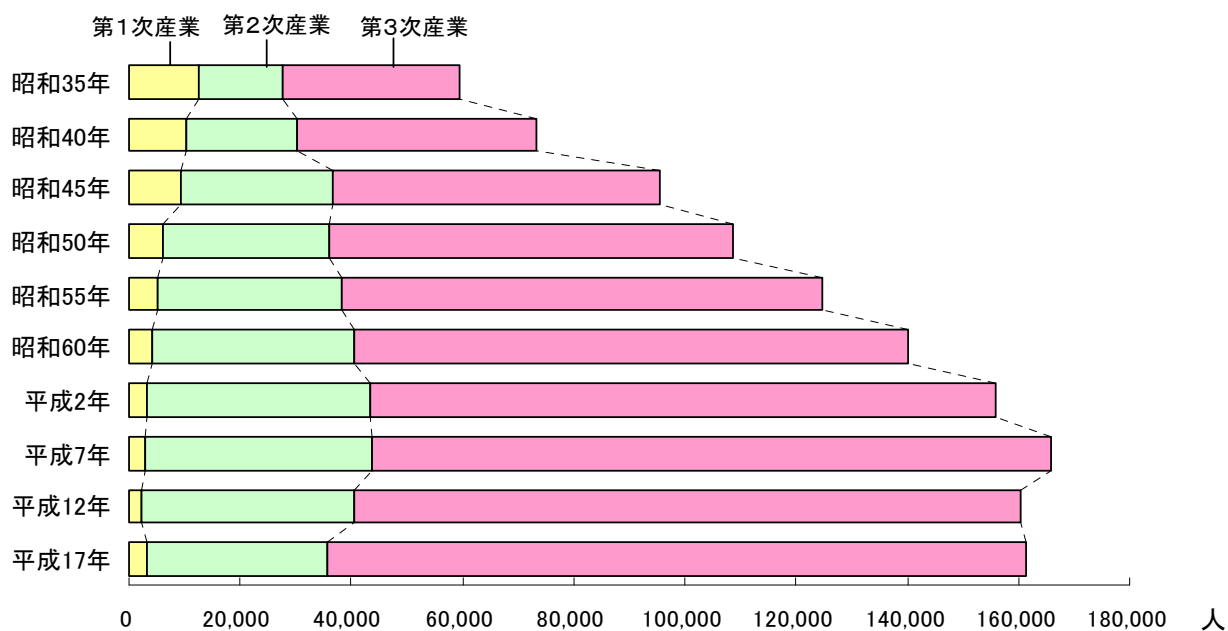
※都市計画基礎調査（H16 年度）

本市における産業別就業者数について近年の動向をみると、第 1 次産業の就業者数は減少から横ばい、第 2 次産業は平成 7 年をピークに減少に転じています。情報、観光、レジャーおよび福祉といったサービス部門を中心とした第 3 次産業の就業者数は大きく増加してきましたが、平成 7 年をピークに伸びが鈍化しています。

平成 17 年時点で就業者数 161,333 人のうち、第 1 次産業 3,134 人（1.9%）、第 2 次産業 32,551 人（19.7%）、第 3 次産業 125,648 人（76.2%）となっています。

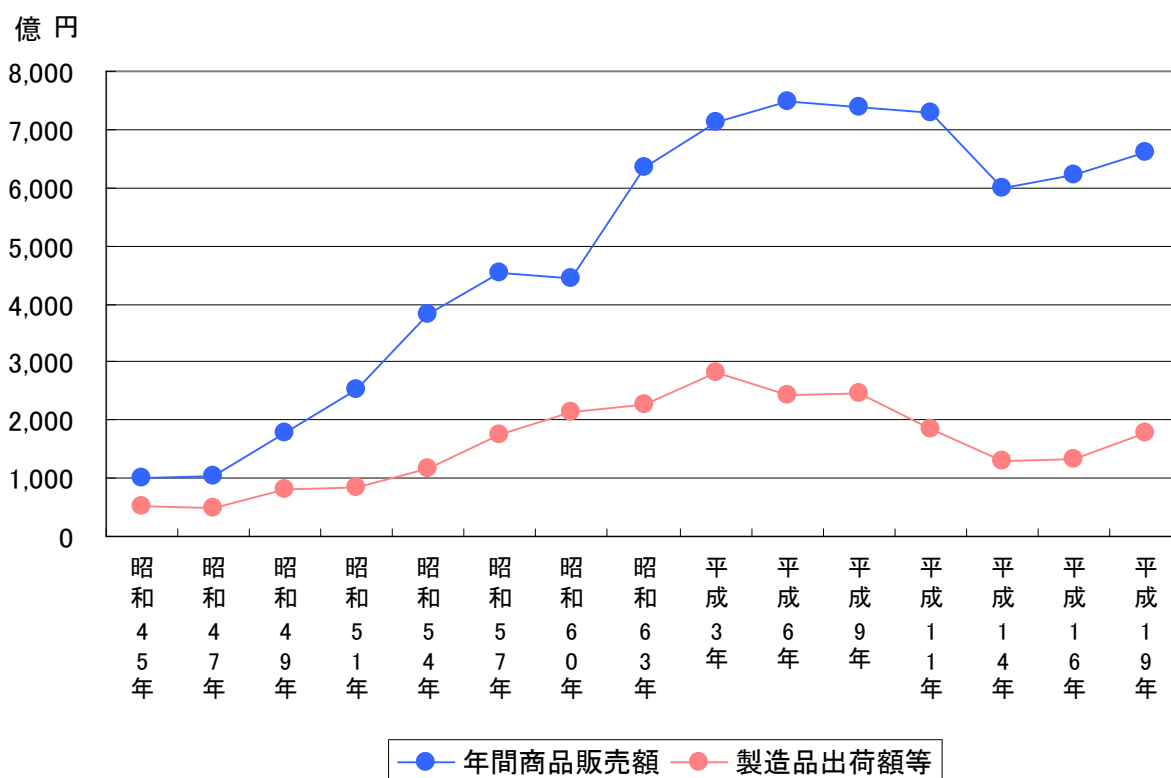
製造品出荷額等および年間商品販売額をみると、昭和 47 年頃から急激な伸びがみられましたが、平成 6 年頃から減少に転じ、近年は微増しています。

平成 19 年時点で製造品出荷額等は約 1,780 億円、商品販売額は 6,606 億円で、県内市町村別構成比は、それぞれ 7.1%、31.1%となっています



出典：国勢調査

図 6 産業別就業者数の推移



出典：製造品出荷額等は工業統計調査
年間商品販売額は商業統計調査

図 7 製造品出荷額等および年間商品販売額の推移

（３）観光入込状況

本市はこれまで、歴史的文化遺産と自然環境に恵まれた国際文化観光都市として、多くの人々を迎え入れてきました。

市外から本市を訪れる入込観光客数は、1998 年（平成 10 年）に「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産リストに登録されたこと、また 1999 年（平成 11 年）から始まった「なら燈花会」などのイベントの開催により、増加に転じ、2003 年（平成 15 年）には年間 1,393 万人となっています。しかし、2004 年（平成 16 年）には、あやめ池遊園地が閉園したことなどの影響を受け、6 年ぶりに減少に転じ、年間 1,293 万 3 千人となりました。

今後は、世界遺産のある国際文化観光都市として、歴史的文化遺産を核とした魅力あるまちづくりに努めることにより、奈良の魅力を「奈良ブランド」として国内外に向けて発信し、観光客の拡大を目指します。



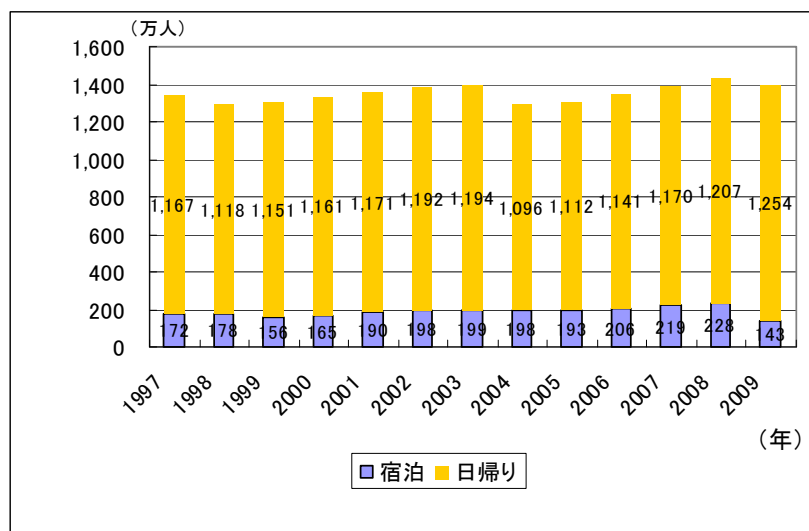
なら燈花会（猿沢池から興福寺へ至る五十二段の階段）



若宮おん祭（春日大社）



鹿の角切り（奈良公園）



出典：奈良市入込観光者数調査報告

図 8 入込観光客数の推移

（４）市街化の変遷

国勢調査より、本市の市街化の動向を昭和 60 年以降についてみると、本市の人口は近年においても漸増傾向にあり、その伸びとともに人口集中地区も拡大してきました。平成 17 年現在では人口集中地区は約 4,644ha に達しています。

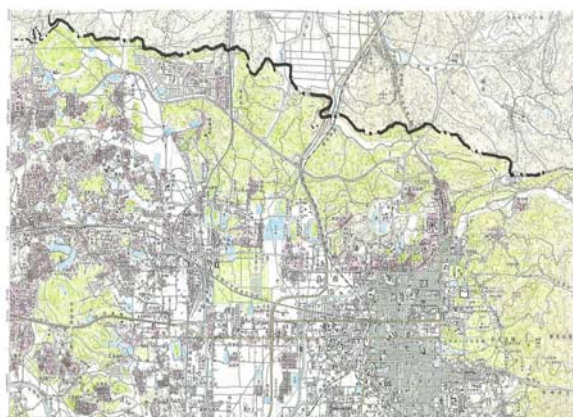
表 2 人口集中地区の推移

年次	人口集中地区			市街化区域	
	面積 Ha	人口 人	人口密度 人/ha	面積 ha	人口 人
昭和 60 年	4,190	278,369	66.4	4,543	290,804
平成 2 年	4,420	297,263	67.3	4,543	296,803
平成 7 年	4,450	309,814	69.6	4,680	312,613
平成 12 年	4,588	321,688	70.1	4,801	316,229
平成 17 年	4,644	317,301	68.3	4,801	328,202

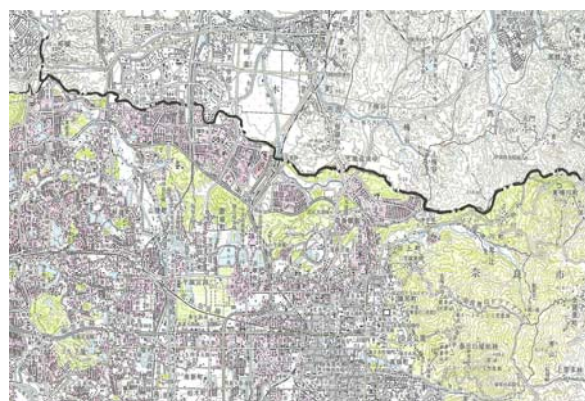
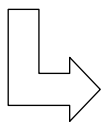
※人口集中地区とは、40 人/ha 以上の人口が集中する地区

※人口集中地区に関するデータは各年国勢調査による

※市街化区域に関するデータは都市計画基礎調査＜大和都市計画区域＞等による



昭和 51 年現在



平成 17 年現在

図 9 市街化の変遷